

## 音楽の意味や価値を創造する生徒の育成

### I はじめに

現代は、AI技術の発達に伴い、新たな社会Society5.0時代を迎えている。こうした社会の中であってこそ、子どもたちが自らの人生を切り拓き、より良い社会を作り出していくことができるように、主体的・協働的な学びの中で課題を発見し解決していく力や、創造的な活動を通して新たな意味や価値を生み出し、より良い社会を創造していく力を育むことが期待されている。

今後さらに人間とAIが共存する社会が進展しても、人間特有の感性や想像力を働かせ、新たな意味や価値を生み出していくことが、豊かな生活や社会を創造していく力を育むことにつながり、特に音楽や音楽科の学習に求められているものであると考えた。

文部科学省が示した「Society 5.0に向けた人材育成」において、これからの社会において求められる力として、「価値を見つけ生み出す感性や力、好奇心・探究力」を育むことが示されている。また、中央教育審議会において、「知性だけでは捉えられないことを、身体を通して、知性と感性を融合させながら捉えていくことが、他教科以上に芸術系教科・科目が担っている学びである」と強調されている。そして「豊かな感性や想像力を育むことは、あらゆる創造の源泉となるものであり芸術系教科等における学習（中略）を充実させていくこと」の必要性が述べられている。これらことから、音楽科の学習において、価値を見つけ生み出す感性や想像力を働かせ、自分にとっての音楽の意味や価値を創造する力を育てていくことが、実生活や実社会で新たな意味や価値を生み出していくことにつながり、これからのSociety5.0時代において求められているものであると考えた。

また、平成29年度学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」として、「生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、（中略）思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること」が求められている。そして「音楽的な見方・考え方」<sup>※1)</sup>を働かせるためには、音楽科の表現活動や鑑賞活動において、感性を働かせることが重要であると捉えた。

前研究シリーズでは、「思いや意図を表現する生徒が育つ音楽科の授業」を研究主題として実践を行ってきた。その結果、「表現のめあて」<sup>※2)</sup>を何度も設定しながら、音楽表現を創意工夫しようとする姿が見られるようになった。しかしその一方で、創意工夫して音楽表現するために最低限必要な知識・技能が身につかず、楽曲分析を通して知覚・感受したことを音楽表現に生かせなかったり、音楽表現を創意工夫する前段階に技能面でつまづいてしまったりした結果、「表現のめあて」を決定していく過程において最後まで粘り強く取り組むことができない生徒が見られた。その原因として、一人ひとりの生徒の実態に応じた指導方法が不十分であったことが考えられる。生徒たちが音楽の意味や価値を創り出していくためには、生徒の実態を理解し、「表現のめあて」を決定していく過程において、「表現のめあて」を達成するために必要な知識・技能を身に付けさせるための指導を工夫する必要があると考えた。

以上のことから、「表現のめあて」を決定していく過程において、個に応じた指導を充実し、他者との協働的な学びの中で、音楽的な見方・考え方を働かせながら、鑑賞活動では、音楽の構造と曲想との関わりについて捉え、その曲の意味や価値について考えさせていく。そして表現活動では、それらを生かして、音楽表現を他者と協働しながら創意工夫したりしていく。これらのことから音楽科では、音や音楽に対する思いや意図といった音楽の意味を創り出したり、音や音楽のよさや美

しさとといった音楽の価値を創り出したりすることを深い学びとする。

そこで、本研究主題を「音楽の意味や価値を創造する生徒の育成」と設定した。

## II 研究の概要

### 1 音楽科の目指す生徒像

音楽の意味や価値を創造する生徒

「音楽の意味や価値を創造する」とは、自分にとっての思いや意図といった音楽の意味を創り出したり、よさや美しさといった音楽の価値を創り出したりすることができる生徒のことである。

### 2 育みたい資質・能力

音楽科における目指す生徒像に近づけるために、以下のような資質・能力を育む必要があると考えた。

「表現のめあて」を決定していく力

「『表現のめあて』を決定していく力」とは、音楽的な見方・考え方を働かせ、鑑賞活動において捉えたことを基に、音楽を形づくっている要素をどのように働かせて音楽表現するのかについて、創意工夫する過程で知識・技能を得たり生かしたりしながら決定していく力を指す。

この資質・能力を育てていくことで、生徒たちは、音楽科が目指す生徒像に近づくことができると考える。

### 3 資質・能力を育むための手立て

題材を「つかむ場」「つくる場」「ふりかえる場」の三つの場で構成し、授業を進め、「個別最適な学び」<sup>注3)</sup>や「協働的な学び」<sup>注4)</sup>の充実を図り、主体的・対話的で深い学びを実現していく。

「つかむ場」は、「つくる場」の教材に生かすための楽曲分析と、現時点で考える『表現のめあて』を設定する場である。始めに、本題材の課題や本題材で扱う音楽を形づくっている要素を確認し、本題材の見通しをもたせていく。また、題材で扱う音楽を形づくっている要素の数を学年や段階に応じて精選・調節していくことで、題材を通して適切に音楽的な見方・考え方を働かせられるようにしていく。生徒が学習の課題に対して見通しをもち、題材を通して音楽的な見方・考え方を働かせながら学習を進めていくことによって、学びの文脈にのせるとともに生徒の主体性を発揮させていく。楽曲分析では、「つくる場」で用いる楽曲や「つくる場」の教材に生かすことのできる楽曲を用いて、音楽を形づくっている要素とそれらの働きから生み出されて感受される特質や雰囲気と曲想との関わりについて、既習内容と関連させながら捉えさせていくことで、知識をより精緻化させていく。また、班で分担したり、意見交流を図ったりしながら、協働的に学習を進めていくことで、様々な捉え方の違いを、実際に音楽を聴いて確かめながら気付かせていくとともに、それらを生かしながら、楽曲のもつよさや美しさを見出させていく。それから、鑑賞文を書かせたりプレゼンテーションをさせたりし、曲想と音楽を形づくっている要素との関わりをつかませていくことで、「つかむ場」で学んだ知識を「つくる場」で生かしていけるようにしていく。最後に一人ひとりに応じた『表現のめあて』を設定させる。その際、音楽を形

づくっている要素の働きと曲想やイメージとの関わりが明確になるように促しながら、これからの学習が生徒自身にとって最適なものになるように『表現のめあて』を設定させていく。

「つくる場」は、「つかむ場」で設定した「表現のめあて」を基に、試行錯誤しながら、思いや意図を実現するための「表現のめあて」を決定し、音楽表現をする場である。始めに、「つかむ場」で設定した「表現のめあて」について、グループや全体で意見交換させ、どうすればより明確な思いや意図を音楽表現できるのかについて、個人やグループで試行錯誤しながら、音楽表現を工夫し、「表現のめあて」を再設定させていく。その際、生徒の実態に応じて、音楽表現の方法を選択させたり、ICT機器を活用させたりする等して、個別最適な学びを図っていくとともに、お互いに教え合ったり、問題点を全体で共有したりする等、協働的な学習を進めていくことで「表現のめあて」を達成するために必要な技能を身に付けさせていく。そして、ペアやグループで中間発表会を行い、音楽を形づくっている要素の働きが生かされた音楽表現であるか、より良い音楽表現はないかICT機器を活用して意見交換させることで、自らの音楽表現を振り返らせたり、多様な音楽表現の仕方に気付かせたりさせていく。また、ICT機器を活用し録音や録画した演奏を客観的に振り返らせることで、より明確な「表現のめあて」を決定させていく。

「ふりかえる場」は、最後に発表会を行い、「表現のめあて」をポイントにお互いの音楽表現を鑑賞し合うことによって、多様な音楽表現の方法に気付かせるとともに、それぞれの音楽表現のよさや美しさを感じ取らせていく。そして、自他の演奏を通して音楽を形づくっている要素の働きを「表現のめあて」の決定にどのように生かし、音楽表現を創意工夫することができたのかを振り返らせ、ワークシート（後掲資料1）に記述させる。そうすることで、音楽を形づくっている要素とその働きについて実感を伴いながら理解し、今後の音楽表現に生かせるようにさせていくことができると考える。

このように、三つの場で「個別最適な学び」や「協働的な学び」を充実させながら、主体的・対話的で深い学びを実現していくことで、音楽の意味や価値を創り出す生徒を育成することができると考える。

#### 4 資質・能力が育まれたかの評価について

「『表現のめあて』を決定していく力」については、それぞれの場ごとにおいて見取っていく。「つかむ場」では、本題材で扱う音楽を形づくっている要素と曲想との関わりについて理解することができているか、音楽のよさや美しさを捉えながら聴いているかについて見取る。「つくる場」では、音楽を形づくっている要素の働きを生かして、「表現のめあて」を決定することができているかについて見取る。「ふりかえる場」では、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な知識・技能を身に付けているかについて見取る。

#### 5 研究の経緯と課題

1年次では、「『表現のめあて』を決定していく力」を育むために設定した手立てが有効であるかを検証し、教科理論の構築を図った。

「個別最適な学び」として、「表現のめあて」を決定していく過程において、音楽表現の方法を選択させたり、ICT機器を活用させたりしたことで、最後まで粘り強く取り組んだり、自分の技能に応じて繰り返し試行錯誤したりする姿が見られるようになった。また「協働的な学び」として、ペアやグループで問題解決を図ったり、中間発表会を行ったりしたことで、友達の助言を参

考に、自らの演奏を振り返りながら、より良い表現方法を模索しようとする姿が見られた。その結果、創意工夫して音楽表現するために最低限必要な知識・技能を身につけ、思いや意図をより明確にしなが、音楽の意味や価値を創り出すことができるようになってきた。しかし、題材で扱う音楽を形づくっている要素が精選しきれていなかったり、音楽を形づくっている要素の具体的な働かせ方を意識させられなかったりした結果、学びの文脈に乗り切れず、深い学びの実現へ到達できないこともあった。従って、題材で扱う音楽を形づくっている要素を焦点化し、生徒がよりそれらを意識しながら音楽表現を工夫させるための手立てが必要であると考えた。

## 6 2年次のねらい

2年次は、題材で扱う音楽を形づくっている要素を見直し、思考する対象を焦点化し、学習のねらいを明確にすることで、生徒の主体性を発揮させていく。そして、「表現のめあて」を決定していく上で、課題に即した具体的な工夫するポイントを提示することで、学びの文脈に乗せ、深い学びを実現できるように、教科理論の確立を目指していく。また引き続き、「表現のめあて」を決定していく過程を見取っていくことで、これらの手立てが、本校音楽科が目指す資質・能力を育むことに有効であったかを検証する。

### Ⅲ 実践例：題材「ボディーパーカッションで、イメージに合ったリズムアンサンブルを表現しよう」（創作分野 第1学年）

#### 1 題材の構想

##### (1) 題材観

ボディーパーカッションとは、手拍子や足踏みをしたり、体を叩いたりする等、体を楽器にして演奏する音楽表現である。叩く部位を変えたり、叩き方を工夫したりすることによって、様々な音色を奏でることができる点が魅力といえる。また、自分の身体を楽器に用いることから、生徒にとって身近で気軽に取り組みやすい活動である。ボディーパーカッションを用いて、少人数編成によるリズムアンサンブルを創作させていくことで、友達と音楽を形づくっている要素の働きを工夫させながら、多様な表現の面白さに気付かせたり、他人と音楽を合わせる心地よさを感じさせたりしていく。

これまでに生徒たちは、この一年の学習で、主たる音楽を形づくっている要素のうち「音色」「リズム」「強弱」「速度」「旋律」「テクスチャ」「形式」について、それぞれどのような働きがあり、それらがどう曲想と関わっているのかについて学んできた。今回は、ボディーパーカッションの魅力の一つである「音色」と、アンサンブルの魅力の一つである音の重ね方といった「テクスチャ」と、音楽の組み立て方である反復・変化・対照といった「構成」を工夫させていくことで、まとまりのあるリズムアンサンブルを創作させていく。

##### (2) 指導観

「つかむ場」では、題材の課題「『音色』『テクスチャ』『構成』を工夫して、ボディーパーカッションでイメージに合ったリズムアンサンブルを創作しよう」を提示する。その後、ボディーパーカッションの参考動画を鑑賞し、学習活動に見通しをもたせていくとともに、叩く部位や叩き方の違いによる「音色」の働き、音の重ね方といった「テクスチャ」の働き、反復や変

化、対照といった「構成」の働きを捉えさせていく。同時に、ボディーパーカッションに取り組み、体の叩く部位や叩き方を工夫すると様々な音色が出せることについて実感を伴わせながら理解させていく。その後、個人で個々の能力に合わせて1小節のリズム譜を作成させた後、4人班に分かれて、お互いのリズムを共有させ、必要に応じて修正させる。そして、ボディーパーカッションに合わせる楽曲を選曲し、楽曲について調べさせながら、自分達がボディーパーカッションで表したいイメージを話し合わせる。最後に、「表現のめあて」を設定させる。なお、本題材では「表現のめあて」の記述方法について、表したいイメージと音楽を形づくっている要素とを表に整理して記述させることで、明確な「表現のめあて」を設定できるようにしていく。

「つくる場」では、リズムアンサンブルを創作させていくが、その際、課題にある「音色」「テクスチャ」「構成」をより具体化した工夫ポイントを提示することで、思考する音楽要素の働きを焦点化して学習を進めさせていく。また、創作の条件として、「自分が創作したリズムを担当すること」を示し、個々の能力に合わせて作成したリズムを自らが演奏していくことによって、学習に対して粘り強く取り組めるようにさせていく（個別最適な学び）。さらに、中間発表会で意見交換させ、「音色」「テクスチャ」「構成」の働かせ方を友達と創意工夫しながら「表現のめあて」を決定していく過程において、音楽の意味や価値を創り出していく（協働的な学び）。

「ふりかえる場」では、発表会を行い、お互いの作品のよさを捉えさせ、最後に題材全体を振り返ることで、音楽を形づくっている要素の働きについて、実感を伴わせながら理解させ、今後の音楽表現に生かせるようにしていく。

以上のように、ボディーパーカッションを用いてリズムアンサンブルを創作する活動を通して、自らの表したいイメージに合わせて、「音色」「テクスチャ」「構成」の働きを生かした音楽の意味や価値を創り出し、深い学びを実現していく。

(3) 題材の目標 **知**：知識・技能 **思**：思考・判断・表現 **態**：主体的に学習に取り組む態度

<b>知</b>	「音色」や「テクスチュア」、「構成」の働きと曲想との関わりについて理解する。 「音色」や「テクスチュア」、「構成」の働きを生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付ける。
<b>思</b>	「音色」や「テクスチュア」、「構成」の働きを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ、試行錯誤しながら、どのように音楽表現するかについて考え、思いや意図をもつ。
<b>態</b>	「音色」や「テクスチュア」、「構成」の働かせ方の多様性に関心をもち、表現の工夫を試行錯誤したり、振り返ったりしながら、主体的・協働的に学習活動に取り組む。

(4) 題材の計画と評価計画

時	・学習活動	評価			
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
1	<p><b>つかむ場</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・課題を知る。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>「音色」「テクスチュア」「構成」を工夫して、ボディーパーカッションでイメージに合ったリズムアンサンブルを創作しよう</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボディーパーカッションの動画を鑑賞する。</li> <li>・ボディーパーカッションに取り組む。</li> <li>・「音色」や「テクスチュア」、「構成」の働きと曲想との関わりについて捉える。</li> <li>・リズムトレーニングをする</li> </ul>	A	<p>「音色」や「テクスチュア」、「構成」の働きと曲想との関わりについて十分に理解している。</p>	<p>「音色」や「テクスチュア」、「構成」の働きを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ、試行錯誤しながら、どのように音楽表現するかについて考え、明確な思いや意図をもっている。</p>	A
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1小節（4分の4拍子）のリズムを個人で創作する。</li> <li>・個人で創作したリズムをグループで共有する。</li> <li>・楽曲を決める。</li> <li>・表したいイメージについて話し合う。</li> <li>・「表現のめあて」を設定する。</li> </ul>				
3	<p><b>つくる場</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・課題に即した具体的な工夫するポイントと条件を提示する。</li> </ul> <p>[工夫するポイント]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①音の重ね方を工夫して、曲の始め方や終わり方、盛り上げ方や落ち着かせ方を工夫すること（テクスチュア）</li> <li>②手拍子だけでなく、叩く部位や叩き方を工夫して音色に変化をもたせること（音色）</li> <li>③構成（反復・変化・対照）を工夫して、曲にまとまりや変化をもたせること（構成）</li> </ol> <p>[条件]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○自分が創作したリズムを担当すること</li> <li>・工夫するポイント①（テクスチュア）と③（構成）を工夫して、リズムアンサンブルを創作する。</li> <li>・「表現のめあて」を再設定する。</li> </ul>	B	<p>「音色」や「テクスチュア」、「構成」の働きと曲想との関わりについて理解している。</p>	<p>「音色」や「テクスチュア」、「構成」の働きを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ、試行錯誤しながら、どのように音楽表現するかについて考え、思いや意図をもっている。</p>	

4	・前時を振り返る。 ・工夫するポイント②（音色）を工夫して、リズムアンサンブルを創作する。	方 法	観察、ワークシートの記述	観察、ワークシートの記述	B	「音色」や「テクスチャ」、「構成」の働かせ方の多様性に関心をもって取り組んでいる。また、他者と意見を共有する中で、他者の助言を参考にしながら、自身の音楽表現をより高められるように取り組んでいる。
5	・中間発表会を行い、グループで意見交流する。 ・交流したことを基に、自分たちの創作作品を見直す。 ・「表現のめあて」を決定する。		観察、ワークシートの記述	観察、ワークシートの記述		
6	ふりかえる場 ・発表会を行う。 ・題材を振り返る。	A	「音色」や「テクスチャ」、「構成」の働きを生かした音楽表現をするために必要な技能を十分に身に付けている。	方 法	観察、ワークシートの記述	
		B	「音色」や「テクスチャ」、「構成」の働きを生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けている。			
		方 法	観察、作品			

## 2 抽出生徒の設定について

### (1) 前題材での学級全体の様子

前題材「日本の音楽に親しもう～箏曲を通して～」では、箏を用いて、「速度」を工夫して自らが表現したいイメージにあった「さくらさくら」を表現する学習に取り組ませた。「表現のめあて」の評価について、以下の通りであった。

「表現のめあて」評価 A評価：24名 B評価：10名 C評価：2名

A評価：「速度」の働きを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ、試行錯誤しながら、どのように音楽表現するかについて考え、明確な思いや意図をもっている。

B評価：「速度」の働きを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ、試行錯誤しながら、どのように音楽表現するかについて考え、思いや意図をもっている。

B評価の生徒は、「速度」をどのように工夫するのかについて具体的に記述できておらず、「速度」の工夫と自らが表現したいイメージとを関わらせながら、明確な思いや意図をもつことができなかった。従って、題材で扱う音楽を形づくっている要素を生徒がより意識して音楽表現を工夫させるための手立てが必要であると考えた。

### (2) 抽出生徒設定の理由及び前題材での抽出生徒の様子

本題材において手立てが有効であったかどうかを検証するために、抽出生徒A（以下、生徒Aと記述する）を設定した。前題材で生徒Aが決定した「表現のめあて」は以下の通りである。

なめらかに演奏する。終わり以外にも盛り上がりをつけるために、速度を変化させたい。

「速度」に触れて記述しているものの、具体的に「速度」をどう変化させるのか記述できていない。また、「速度」の働きの、自分が表したい曲想との関わりについても、不明瞭である。

以上のことから、B評価となった。

生徒Aは、B評価となった生徒の傾向を顕著に示しているため、抽出生徒と設定した。

### (3) 本題材で期待する抽出生徒の姿

自らの表したいイメージに合わせて、「音色」「テクスチャ」「構成」の働きを生かした音楽の意味や価値を創造していく姿

## 3 本題材における生徒の具体的な様子と考察

### (1) つかむ場（第1・2時）

#### ア 学級全体の様子

本題材では、題材の課題を「『音色』『テクスチャ』『構成』を工夫して、ボディーパーカッションでイメージに合ったリズムアンサンブルを創作しよう」と設定し、学習を進めた。

「つかむ場」では、題材の課題を確認した後、ボディーパーカッションの参考動画を鑑賞し、叩く部位や叩き方の違いによる「音色」の働き、音の重ね方といった「テクスチャ」の働き、反復や変化、対照といった「構成」の働きを捉えさせた。「音色」の働きとして、足踏みや太腿を叩くと低音が鳴り、肩や手を叩くと高音が鳴り、それらを組み合わせることによって面白さが生まれることに気付くことができた。「テクスチャ」の働きとして、音の重なりを増減することによって盛り上がりや落ち着きを表現することに気付くことができた。「構成」の働きとして、反復を用いることで曲にまとまりが生まれる一方で面白みに欠けること、変化を用いることで面白みが生まれる一方でまとまりに欠けること、対照を用いることで、曲に変化が生まれ印象付けることができる等、気付くことができた。その後、個人で1小節のリズム譜を作成させた後、班に分かれてお互いのリズムを共有させた。そして、ボディーパーカッションに合わせる楽曲を選曲し、自分達が表したいイメージについて話合わせた後、「表現のめあて」を設定させた。この時点では、表したいイメージを実際にどのように「音色」「テクスチャ」「構成」の働きを工夫することで表現できるのかについて、漠然と記述されているものが多かった。

#### イ 生徒Aの様子

生徒Aが「つかむ場」の最後に設定した「表現のめあて」は以下の通りである。

表したいイメージ	音色の工夫	テクスチャの工夫	構成の工夫
堂々とした雰囲気	あまり高くない音	溜めを大切に する	リズムの抑揚

表したいイメージを「堂々とした雰囲気」としているものの、具体的に音楽の諸要素の働きをどのように工夫して表現するかについて、具体性を欠いており、明確でない。従って、工夫するポイントをより具体的に示し、思考を焦点化させていく必要がある。

その一方、始めの鑑賞活動では、聞き取ったことと感じたこととの関わりについてワークシートにまとめたり、選曲について話し合ったり、繰り返しリズム作りを試行錯誤したりするなど、学習活動に対して意欲的に取り組む姿が見られた。

### (2) つくる場（第3～5時）

#### ア 学級全体の様子



「つくる場」は、実際にリズムアンサンブルを創作させる場であるが、始めに、「音色」「テクスチャ」「構成」をより具体化した工夫ポイントを提示した。

**【具体的な工夫するポイント】**

- ①手拍子だけでなく、叩く部位や叩き方を工夫して音色に変化をもたせること（音色）
- ②音の重ね方を工夫して、曲の始め方や終わり方、盛り上げ方や落ち着かせ方を工夫すること（テクスチャ）
- ③構成（反復・変化・対照）を工夫して、曲にまとまりや変化をもたせること（構成）

また、「自分が創作したリズムを担当すること」を条件とし、適切な曲の長さや選曲した曲の構成（Aメロ・Bメロ・サビ等）をこちら側で提示したことで、最後まで粘り強く学習に取り組めるようにさせた。

第3時限では、「テクスチャ」「構成」を工夫させた。「曲の始めは落ち着かせたいから、音の重なりを減らしたい」や「サビに向けて徐々に盛り上がっていくようにしたいから、音の重なりを段々と増やす」等というように、各班、具体的な工夫するポイントを意識しながら、場面ごとにまとまりや変化をもたせながら創作を進める姿が見られた。

第4時限では、「音色」「構成」を工夫させた。始めに、第1時限で鑑賞した参考動画をもう一度視聴し、音色の働きと曲想との関わりについて振り返ってから創作に入ったことで、活動に見通しをもたせることができた。そして、具体的な工夫ポイントを基に、「面白さを出すために、足、太腿、肩といった様々な音高の音色を混ぜよう」や「安定感を出すために、全ての拍に足踏みを入れよう」等、叩く部位や叩き方を試行錯誤する様子が見られた。さらに、班の中には、「サビは明るくしたいから、サビの部分は手拍子を多くしよう」等、場面ごとの曲想に合わせて叩く部位や叩き方を変化させようとする姿も見られた。

第5時限では、中間発表会を行い、お互いの作品についてアドバイスをし合った。班の中には、「サビの前に何も叩かない空白の部分を作った方が、より印象的にすることができる」や、「叩く人の組み合わせが一緒に変化に乏しいから、テクスチャを工夫すると良い」等、他の班の工夫やアドバイスを参考にして、自分たちの演奏を見直す姿が見られた。

また最後に、「表現のめあて」を決定させたところ、始めに設定した「表現のめあて」がより具体的に書かれ、明確になった生徒が増加したことから、「具体的な工夫ポイント」を示したことで、学びの文脈にのせて学習を進めさせることができた。しかし、「構成」の工夫について、明確に記述できていない生徒が目立った。場面ごとに、音色や音の重ね方を工夫して曲にまとまりをもたせたり変化をさせたりしていたが、それらの「構成」の工夫を意識化させることについて、指導が不十分であったことがわかった。また「音色」の工夫について、「テクスチャ」の工夫を記述する生徒が数名見受けられ、知識の理解について課題が残った。

なお、全体の評価は、A評価が18名、B評価が16名、C評価が2名であった。

**イ 生徒Aの様子**

生徒Aが「つくる場」の最後に設定した「表現のめあて」は以下の通りである。

表したいイメージ	音色の工夫	テクスチャの工夫	構成の工夫
まとまりのある、明るく と言うよりは堂々と炎 が燃え上がるイメージ。	重低音を一回だけ入 れることで全体的に まとまった。	〇〇ちゃんと一緒のリズ ムなので、二人の音が重なる ところとそうでないところを 組み合わせると統一感を作る	反復方法を用いて、 盛り上がり表現す る

始めに設定した「表現のめあて」と比較して、記述が具体的になり、表したいイメージの「まとまり」をもたせるために、「音色」の工夫では重低音を一回入れること、「テクスチャ」の工夫では、音の重なりにも規則性をもたせることによって、表現していた。また、表したいイメージの「堂々と燃え上がるイメージ」をもたせるために、「構成」の工夫において、反復を用いることで盛り上がり表現していた。以上のことから、明確な思いや意図をもっていると判断し、A評価とした。

### (3) ふりかえる場（第6時）

#### ア 学級全体の様子

「ふりかえる場」では、最終発表会を行い、お互いの作品のよさを捉えさせ、最後に題材全体を振り返らせた。発表会では、前題材までの表現活動に積極的でなかった生徒もしっかりと参加し演奏する姿が見られた。自分が演奏できるリズムを用いらせたことで簡単にアンサンブルできる点や、ボディーパーカッションという身近な表現方法であった点が、表現活動が苦手な生徒にとっても参加しやすかったのではないかと考える。

また創作作品を評価したところ、A評価が21名、B評価が13名、C評価が2名であった。以前は、「表現のめあて」に対して、作品（表現）が伴わないといった音楽の意味や価値との乖離が目立ったが、一致する生徒が増加した。その要因として、思考するポイントを焦点化できたことで、結果、作品として表現することができたことが考えられる。

最後に、「音色」「テクスチャ」「構成」について学んだことを振り返らせた。「音色」「テクスチャ」について、「叩く部位を手拍子にしたり、音の重なりを多くしたり工夫することで明るいイメージを表せるというふうに、曲のイメージを変えられることがわかった」等、学んだことを具体的に記述できている生徒が多かったが、「構成」について、具体的に振り返ることができていない生徒が目立った。

#### イ 生徒Aの様子

発表会では、仲間と協力して発表する姿が見られた。また創作作品を評価したところ、「表現のめあて」に記述されたことが、作品として創出することができていたため、A評価とした。

最後に題材の振り返りでは、以下の通り記述した。

堂々とした曲の表現をするために、反復を利用してわかりやすく盛り上がり表現することで堂々としたまとまりのあるイメージにしたり、重低音を重ねたり同じリズムは表現方法を同じにすることで全体のまとまりを強くした。そして、サビ前は音を強くしたり、サビの途中で地味にテクスチャを変えて見ることで溜めができてかっこよくなった。

叩く部位や叩き方の違いによる「音色」の働き（赤字）、音の重ね方といった「テクスチャ」の働き（緑字）、反復や変化、対照といった「構成」の働き（青字）を工夫することによって、表したいイメージを変化させることについて振り返ることができ、題材を通して理解を深めることができていた。

以上のことから、自らの表したいイメージに合わせて、「音色」「テクスチャ」「構成」の働きを生かした音楽の意味や価値を創造することができたと考えられる。

## 5 実践の成果と課題

今回、実践のねらいとして掲げた2点について、成果と課題を振り返る。

①「表現のめあて」を決定していく上で、課題に即した具体的な工夫するポイントを提示することで、思考する音楽要素の働きを焦点化し、思いや意図を明確にすることができたか。

### 【成果】

工夫するポイントを具体的に示したことで、例えば3時限の公開授業では、「テクスチュア」の工夫について、4時限では、「音色」の工夫について思考するべきことを明確化し、試行錯誤する生徒の姿が見られた。以上のことから学びの文脈にのって、学習することができた。

### 【課題】

「表現のめあて」を記述する際に、「音色」と「テクスチュア」、「テクスチュア」と「構成」を混同している生徒が見られた。「表現のめあて」を記述させる際も、具体的な工夫ポイントを意識させながら記述させるように働きかける必要がある。

②本題材で精選した音楽を形づくっている要素「音色」「テクスチュア」「構成」が、生徒の主体性を発揮させる上で、適切であったか。

### 【成果】

「テクスチュア」と「音色」について、題材を通して主体的に試行錯誤する姿が見られたことから、設定としては適切であった。引き続き、題材に合わせて、生徒の主体性を発揮させるために適切な、音楽を形づくっている要素を見極め、設定していきたい。

### 【課題】

「構成」について、考えが及んでいない生徒が見られた。実際、生徒の様子を見てみると、選曲した曲の「構成」に合わせてまとまりや変化をもたせていたが、それを「表現のめあて」としてアウトプットすることができていなかった。その原因として、既に出来上がっている楽曲の構成に合わせてボディーパーカッションを工夫したため、特に「構成」を意図しなくても表現を完成することができたことや、題材計画において「構成」について考える時間が不十分だったことが考えられる。そのため、前題材ではA評価が24名だった生徒に対して、18名と減少した。従って、1年生では、「音色」「テクスチュア」に焦点を当てて、2年生・3年生でさらに「構成」に焦点を当てる等、段階的にカリキュラムを作成したり、題材で設定する音楽を形づくっている要素をさらに吟味したりする必要がある。

## IV おわりに

本研究の2年次では、題材で扱う音楽を形づくっている要素を見直し、課題に即した具体的な工夫するポイントを提示することで、学びの文脈にのせ、深い学びを実現できるように、研究を進めてきた。その結果、題材で扱う音楽を形づくっている要素を、具体的にどのように働かせて音楽表現するのかについて、創意工夫する中で知識・技能を得たり生かしたりしながら、「表現のめあて」を決定させることができ、音楽の意味や価値を創造する生徒の育成につながったと考える。今後、他の題材においてもこれらの手立てを講じ、改善していくことで、音楽科の目指す生徒像の更なる実現に繋げていきたい。

## 音楽科

- 注1) 「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連づけること」と考えられる。
- 注2) 自己の思いや意図と、それを実現させるための表現の仕方(音楽の要素の働かせ方や奏法)について文章で書き表したものを指す。
- 注3) 多様な教材や音楽表現方法を提示して選択させることで、自らの学習を調整しながら粘り強く取り組ませたり、自らの学習が最適となるようにさせたりしていく学びのことを指す。
- 注4) 知覚・感受したことを共有し共感したり、考えを交流したりすることで、様々な捉え方や考え方を生かしたより良い音楽表現を創意工夫していく学びのことを指す。

## 引用文献

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年6月）解説－総則編－』東山書房、2017年、77ページ

## 参考文献

- 齊藤忠彦・菅裕『音楽科教育法』教育芸術社、2019年
- 小林洋子・沼田峰紀『音楽教育のススメ』幻冬舎、2021年
- 中島寿・高倉弘光・平野次郎『音楽の授業で大切なこと』東洋館出版社、2017年
- 増田謙太郎『音楽のユニバーサルデザイン』明治図書、2019年

課題：「音色」「テクスチャ」「構成」を工夫して、ボディーパーカッションでイメージに合ったリズムアンサンブルを創作しよう

	要素の働き	感じたこと
音色		
テクスチャ		
構成		

【評価】知・技 ( A ・ B ・ C )

○工夫する具体的なポイント

- ①音の重ね方を工夫して、曲の始め方や終わり方、盛り上げ方や落ち着かせ方を工夫すること (テクスチャ)
- ②手拍子だけでなく、叩く部位や叩き方を工夫して音色に変化をもたせること
- ③構成 (反復・変化・対照) を工夫して、曲にまとまりや変化をもたせること

○表現のめあて

	表したいイメージ	音色の工夫	テクスチャの工夫	構成の工夫
①				
②				
③				

【評価】思 ( A ・ B ・ C )

○題材を振り返りましょう。

【評価】態 ( A ・ B ・ C )

○グループのメンバーのリズム

	名前	リズム		名前	リズム
A			C		
B			D		

○曲名 ( )

小節	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
A																
B																
C																
D																
メモ																
小節	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
A																
B																
C																
D																
メモ																
小節	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
A																
B																
C																
D																
メモ																
小節	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64
A																
B																
C																
D																
メモ																

【評価】知・技 ( A ・ B ・ C )